

平成18年 御鎮座1200年祭

発行日 吉神社 電話 018-828-3033

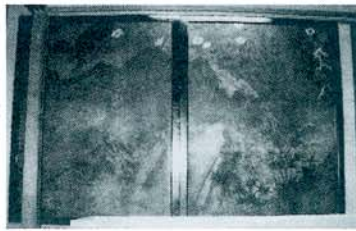
# 山王祭 秋田市指定文化財に

新屋の町の、年に一度のおまつり「山王祭」が、秋田市の指定文化財になりました。ここ数年かけて、秋田市教育委員会、調査を行って来たもので、去る三月二十九日付で、指定書が交付になりました。「頭人」「竹矢来」「神輿」などを、守り続けて来た、「新屋の人々の心意気」が認められたもので、大変喜ばしい事です。

日吉神社は、明年、御鎮座一千二百年祭を予定しておりますが、千二百年の昔から、神社だけがここにあったのではなく、それを私たちの祖先が守り、拜んで来た事に大きな意味があります。千二百年の歴史の上に、今、私達が立っている事を、もう一度、思い返してみたいと思います。同じように、「山王祭」を、このような形で続けて来た、先輩方の歴史が、今、認められた事を感じ、またそんな町に誇りと自信と愛着を持って行くよすがになって欲しいと願っています。

## 市文化財2件追加

秋田市 天徳寺の伝久保田城杉戸など



伝久保田城杉戸

秋田市教委は、同市東三嶽根の天徳寺所蔵の引き戸「伝久保田城杉戸」と、新屋地区に伝わる「日吉神社山王祭」を市指定文化財に指定した。市指定文化財は144件となった。

「伝久保田城杉戸」は江戸時代後期、秋田藩お抱えの絵師が制作したとされ、2枚1組の計4枚が現存する。1枚の大きさは縦175センチ、横130センチ。1組は片面にツバキや竹を彩色で描いた「花木溪流図」と、水墨でパシヨウを描いた「芭蕉図」の組み合わせ。もう1組は、水墨による松竹梅図。



日吉神社山王祭

同寺住職の口伝では、杉戸はかつて同市の久保田城本丸に使われていたが、1872年、城を県庁舎に転用する際に不要となり、同寺に移管されたという。城などの場所が使われていたかは不明だが、本丸広間と

## 山王祭の諸行事

◎頭人差定式(とうにんさじょうしき) 四月十三日、春祭にあわせて、頭人決定の御報告をし、御許可をいただきます。



◎小祓式(こばらえしき) 五月一日、お祭りの月の初日、統前町の祭典重役のお宅を回り、家の中や衣類を獅子頭で祓います。

五月二十日、頭人の家の一室にシメ縄を張り廻らし、祭事を行った後は、斎りに使用する事ができなくなります。



◎大祓式(おおばらえしき) 五月二十日、頭人の家の一室にシメ縄を張り廻らし、祭事を行った後は、斎りに使用する事ができなくなります。



◎五色幣納め(ごしきへいおさめ) 頭人が町民を代表して神様に御奉仕している証のため、二十一日より毎夜御幣を一本ずつ持ってお参りをします。



◎御差鉾(おさしほ) 二十五日、宵宮祭の主役。頭人は、御差鉾の御幣の中に入っ



◎助灯笼(すけでんとう) 御差鉾おさしほ(の道中を、闇に浮き上がらせるのは、子供達が持つ助灯笼のあかり。大人と子供が一緒に汗を流す事ができるのも祭りの良さの一つです。



◎御神幸(ごしんこう) 二十六日、年に一度、神様が町内の平穏と安全を見定める行進。賑々しさも最高潮となります。



◎御神輿(おみこし) 御神幸の時の神様の乗り物が御神輿です。神様に最も近い場所です。仕事ができるのは、神輿担ぎの団体、「新興連」の誇りです。



◎御神宿(ごしんしゆく) 頭人のお宅なので頭屋とも呼びます。竹矢来で囲い、赤砂を敷き庭の様に作った中に篝火が燃えさかると、別世界を作り出します。



平成十七年 婦人講春祭 皆を寝め 明るいうらと 作る母

平成十七年五月八日撮影 秋田新聞



# 平成十七年 山王祭

統前町下表町当番組上表町・中表町  
 頭人 海風敏夫氏  
 祭典委員長 工藤利夫氏  
 祭典実行委員長 大塚誠智氏  
 大川町 十篠団地町

## 平成17年「日吉山王祭」御差鉾ご巡幸順路



5月25日(水) 御差鉾ご巡幸順路詳細

(往路)	18時30分	神事開始
日吉神社→表町→加藤仕出し右折→山本習字	19時20分	神社出発
教室右折→大森宅右折→森の風右折→御神宿	20時00分	御神宿到着
(復路)	20時50分	御神宿出発
御神宿→流田タバコ右折→忠専寺→神社御還御	21時20分	神社御還御

## 平成17年「日吉山王祭」御神輿ご巡幸順路



5月26日(木) 御神輿ご巡幸順路詳細

(往路)	10時00分	神事開始
日吉神社→表町→加藤仕出し右折→山本習字	10時50分	神社出発
教室右折→大森宅右折→森の風右折→御神宿	11時50分	御神宿到着
(復路)	13時00分	御神宿出発
御神宿→流田タバコ右折→忠専寺左折→駅前通り→7号線横断→新屋敷→豊岩路切→一本木	14時20分	一本木到着
(復路)	14時50分	一本木出発
一本木→豊岩路切→ナイス→神社御還御	15時30分	神社御還御

## 平成十六年 山王祭 標語コンクール金賞作品

- ・みらいへと ひびけあらの かしまだいこ
- ・わき水は 新屋敷いきの 宝物
- ・春さくら 夏に花火で お物川
- ・千二百年 日吉の森に ひびく笛太鼓

### 社務所・会館を建替

日吉会館は、昭和三十三年・新屋公民館として現在地に建てられ昭和五十年、現在の二階建ての新館部分が増築されました。  
 昨年(平成十五年)十六年の突風で、新館の屋根が剥がされ、最初に建てた部分も相当にいたんできました。  
 役員会・氏子総代会では、見込んでいた結婚披露宴が全く行われない現状で、このような大きな施設を持つている事は、運営上大きな負担になることから、現在の建物を取り壊し、凡そ四分の一度程度の新しい社務所兼会館を建てる事にしました。  
 五月の山王祭終了と同時に工事に取掛かり、十月一杯で竣工の予定です。氏子の皆様には御不便をおかけしますが、よろしく御理解の程お願いします。

### 平成十七年 年祝会

今年の厄年祝、年祝祭は、四月三十日、暖かな春風がそよぐ中、一一七名の参加により賑々しく行われました。  
 八十八才三名、七十七才二十一名、六十一才六十二名、四十二才二十五名、三十三才六名の参列者は、神主や巫女の舞う神楽に見入っていました。実行委員の方々は以下の通りです。  
 会長 石井 誠 副会長 片岡 学  
 幹事長 西村 晋悦 会計 鈴木 太  
 副幹事長 佐藤 修平 幹事 三浦 純也  
 幹事 藤原 正  
 桜田 正志  
 高橋 保  
 塚田 裕樹  
 佐々木直樹  
 石黒 直己  
 佐藤 義弘  
 佐々木宏幸  
 佐藤 浩之  
 會計監査 奉納品「献灯台」

### 神社へ来てみませんか

神社はスキイの高い所・特別の人だけが行く所と思っている人が多いですが、誰でも参加できる行事もたくさんあります。

六月三十日 夏越の大祓  
 夏を迎えるに先立ち、半年間のけがれを落とし、病気の他の災を防ぐことを祈ります。  
 七月七日 セタ  
 七月一日から七日まで、神社の前に飾られた笹竹に「ねがいごと」を書いた短冊をつるします。神社では一年間短冊をお守りします。

九月十八日(旧八月十五日) 仲秋の名月 お月見の会  
 神社の前に特設の観月席を作り一重持ちで、三々五々集まってひと時を過ごします。

二月三日 節分祭  
 昨今、忘れられがちな家庭内の行事につなげるため、神社の中で豆を撒き、また豆を持ち帰って各家庭で「豆まき」をして貰います。



“音もなく 香もなく常に天地は 書かざる経を 繰り返しつつ”  
 日新小学校校庭に立つ、二宮尊徳(金次郎)翁の歌です。  
 その尊徳翁の遺訓『報徳訓』をご紹介します。  
 父母の根源は天地の命令にあり 身体の根源は父母の生育にあり 子孫の相続は夫婦の丹精にあり 父母の富貴は祖先の勤功にあり 吾身の富貴は父母の積善にあり 子孫の富貴は自己の勤勞にあり 身命の長養は衣食住の三にあり 衣食住の三は田畑山林にあり 田畑山林は人民の勤耕にあり 今年の衣食は昨年の産業にあり 来年の衣食は今年の艱難にあり 年々歳々報徳を忘るべからず  
 世の中が、今、自分が楽しければそれでいいという風潮に流れて久しくなりました。  
 今の自分は一体何から作られているのでしょうか。  
 祖先―父母―自分―子孫という時間の流れの縦軸があり、同じ時間帯に生きるもの同士という横軸の中で、動物や植物のイノチを奪いながら生きていく。その事を子孫に伝えるのが人としてのつとめである。と書いています。  
 自分を生かしてきているものは、周りの人であり、動物であり、植物であるということです。  
 “いただきます”「ちそうさま」は、自分を支えてくれているイノチに対して言っている言葉なのです。  
 最後に二宮尊徳翁作と伝えられる古歌を一首  
 “この秋は雨か嵐か知らねども 今日勤めに田草取るなり”